

森(毛利)一族の系譜から「兵橋重政」について

宮下良明

(会員 佐伯市古江)

本誌一六五・一六六号で林寅喜氏と私が、藩祖、毛利高政の系譜に触れ、その一部を掲載したことについて、会員で徳島県在住の「森秀郷氏」より、この系譜には誤認が目立つという意味の指摘を受けた。

その後、一七三号で「野々下晃氏」の研究による、高政に関する一連の論文中、高政の前名が民部大輔友重であるという『戸倉伝説』について、森一族の後裔森氏ごうえいより、再度異論と共に資料が野々下氏の元に送られてきた。それによれば、民部大輔友重（一般には友重と高政は同一人物が通説）は、高政ではなく別人という意味の指摘である。そこで早速電話により問い合わせたところ、今度私の所へ森一族と、豊臣家臣団に関する膨大な資料が送付されてきた。その資料を逐一報告する余裕はないが、果たして高政と友重は別人か否かについて、結論づ

けることは難しいし差し控えたい。しかし、今後とも研究を重ねることは重要と考えている。

思えば野々下氏の論文『戸倉伝説』に端を発し、森秀郷氏との文通、電話等による交流が長く続いた結果、高政の系譜と森一族の関係、さらに秀吉と家臣団の動向等、広い範囲にわたり知識を得ることができた。野々下氏には感謝の念にたえない。

さて、森資料とその他の文献によれば民部大輔友重と、天正・文禄・慶長年間において、一族と共に秀吉旗下で行動したという毛利豊後守兵橋（兵吉）重政なる人物の存在を知った。そこでよく調べて見ると、実像の兵橋重政は当佐伯では余り良く知られていないのではないかと思う。



吉安墓
(相江・王国寺境内)

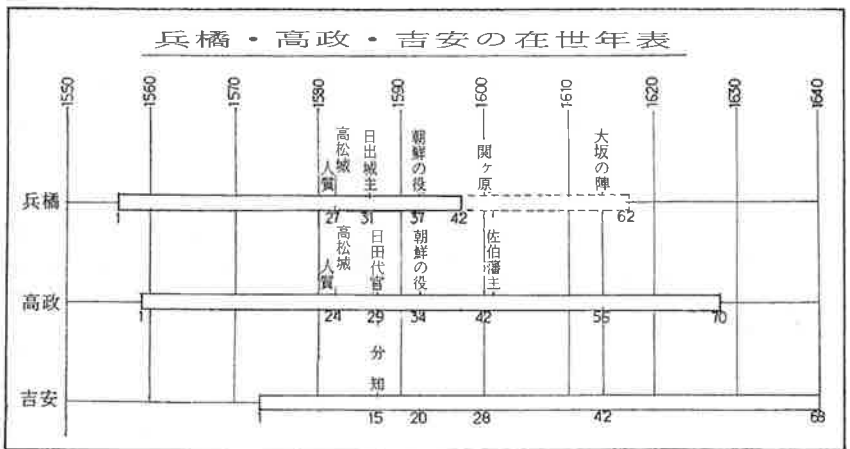
史書としての佐伯市史に載っている兵橋重政は、第三章近世史(一)の中で、毛利氏略系を示した上で、後文に、高政の弟吉安(のちに堅田、床木二千石を分知された)が、兵橋重政であるとしている。

市史が祖述した原本は、鶴藩略史と記載している。では略史が参考にした原本とは、つまり温故知新録(文化年間関谷長熙が毛利家譜、文書、家臣に伝わる書類、口伝等を集めて七十五巻にまとめたもの)と思われる。

【温故知新録】(佐伯市教育委員会発行)には、毛利家系譜のことについて、幕府からの「御尋書」に対し、「御答書」の形式で提出した記録文書として掲載されている(四四二頁)。内容は高政と重政はどちらが兄か弟かという幕府の問いに対し、古書物等によって、高政の弟と決定したと答えている。

そこで、森資料という兵橋重政と、市史が記す吉安を兵橋とする違いについて疑問点を上げると、

- (一) 幕府に対し御答えの当時(寛政末八一八〇〇頃)、藩は兵橋のことを良く知らなかった。つまり、当時藩保存の文書類には、兵橋の記録はなかった。
- (二) 兵橋と高政は同じ血を分けた兄弟か否かは別として、



兵橋が三歳年長(在世年表参照)であるから兄である。にもかかわらず弟吉安を兵橋であるとしたのは、高政の一族殊に日田在任以前の記録を消さねばならない何等かの理由があったのではなにか。(藩祖の不面目は公表した

くない(次項参照)等)

(三) 兵橋重政は、弘治二年(一五五六)に生まれ、慶長二年(一五九七)四十二歳で死亡(森資料では偽装死で、大坂の陣に加わり落城後逃れて元和三年(一六一七)、六十二歳で死亡したとしている)、吉安は寛永十七年(一六四〇)に六十八歳で死亡しているから、生まれは天正元年(一五七三)である。したがって、兵橋とは十八歳もの差がある。等である。

鶴藩略史は、明治年間、十三代高範が、平山右文治に命じ藩主の系譜を著述させた記録書である。原本は佐伯にはないという(佐伯郷土史後編)が、それはさておき新録の内容が鶴藩略史に伝承され、さらに佐伯市史でもこれを採用して、吉安即兵橋重政と想定し、後文がつくられたものと考えている。

そこで、森資料をはじめその他諸文献によって、兵橋重政の経歴を記すと、

(一) 森資料・毛利豊後守重政

通称は兵吉(いひきち)または兵橋(ひょうきょう)、和泉守、母は識田掃頭信昌女、室は豊後深江城主、大郎親長女、後室は大友義鎮(宗麟)女、豊前豊後において十二万石、はじめ秀吉の小姓とな

る、秀吉が備中高松城水攻めの時、和睦の人質として毛利氏の許に赴いた。その時、叔父の勝信(のちの小倉城主)と森勘八郎高政が、重政の従者をつとめた。天正十四年(一五八六)豊後日出城を賜わる。慶長二年(一五九七)五月六日没、法名宝樹院殿前豊後州鶴翁西林大居士(偽装死については前述の通り)。生年は弘治二年(一五五六)

(二) 寛政重修諸家譜

重政兵橋、豊後守、従五位下、初め森を稱す、識田右府(信長)に属す。のち豊臣秀吉につかえ、豊後国杵築城を賜わる。慶長二年五月六日杵築において没す。法名西林、妻は大友左衛門義鎮の女。

(三) 岡山県通史(県史)

重政の系譜は寛政諸家譜と略々同じ。

県通史は重政の長男、重次のことを、略系を示した上で詳しく述べているが省略する。(県史が取り上げた意味は大きい)

次に、兵橋重政に関係の文献を挙げると、

竹田中川家文書(神戸大学文学部日本史研究室編)

(1) 毛利輝元人質説より三年後の天正十三年(一五八五)

当時兵橋は秀吉の馬廻り役（秀吉の側近で警衛の任に当たり各大名に朱印状等を伝達する役目もしていた）をしていた。その頃（五月十五日）秀吉が中川藤兵衛

（初代岡藩主秀成兄）に与えた朱印状の中に、森兵吉の名があり、横書きして吉成とあるが、吉成は当時小倉城主であって重政の誤りであると、大学側も認めているという。

(2) 天正十三年七月八日、木津城（阿波国）攻めに際し森兵吉重政が朱印状を、中川藤兵衛に持参している。

(3) 天正十六年（一五八八）五月八日、秀吉が中川秀政に与えた朱印状の中に、森兵吉重政の名が見られる。

黒田家譜

筑前国藩主黒田家の記録である。主として藩祖孝高（如水）と、初代長政の譜を収めているが、兵橋重政に關係するものとして、

(1) 豊臣秀吉書状

天正十五年（一五八七）島津征伐の時、秀吉本隊は肥後路を廻り、弟秀長軍は豊後路を廻ったが、黒田勢は秀長軍旗下に入った。この時、黒田勘解由（孝高）宛の朱印状伝達者として、森勘八、毛利兵吉の名が見える。

(2) 慶長二年（一五九七）第二次出兵の際、先手の衆へ御目付として毛利豊後守重政の名が朱印状にある。

中国毛利家文書 八七六号 豊臣秀吉朱印状

天正二十年（文祿元年八一五九二）第一次朝鮮の役に際し、毛利輝元へ六端帆の船九十艘を、四人の者に渡すよう命じた秀吉の催促状と思われる中に、毛利兵橋重政の名が見える。

島津資料集（征韓録卷之三）

(1) この文献は、文祿二年（一五九三）第一次朝鮮の役における島津家記録文書集である。秀吉が和戦の如何にかかわらず、牧司城（晋州城）攻略を進めるために、動員計画を明示した貴重な史料といえる。

晋州城の攻囲戦は、講和交渉中であって最も著名な戦いであったという。文中に諸將と並んで、毛利兵橋重政が、五百二十人の家来と共に（金海文城）出兵している。

参考のため文祿二年（一五九三）頃の佐伯領はどうであったかという点、同年正月大友吉統が、朝鮮において敵前逃亡の罰により、豊後国を没収され、その旗下にあって佐伯惟定も所領を失い、藤堂家家臣となって宇和島へ

去り、後は豊臣秀吉の蔵入地として代官支配となった時代である。

征韓録卷の四

慶長二年（一五九七）二月秀吉が再度の朝鮮攻めに際して、軍勢の配備とその進軍する次第とを定め、各部将に授けた朱印状と陣立書であるが、目付として毛利豊後守重政の名がある。この時には、豊後守に昇進していることが分かる。

また、日田市史によれば秀吉の日田支配時代の文書として、近日中に毛利兵橋、宮木長次を遺す。また、文禄三年（一五九四）に兵橋は速見郡の代官として、日出に赴任した云々といったことが書かれている。

宮木長次の経歴は日田市史に詳しいが、付け加えると、慶長三年（一五九八）八月秀吉死亡の節、徳永式部法印と共に、朝鮮在戦中の部将達に、和議を結び引き揚げよとの、徳川家康の密書を持参して渡海した人物である。

（島津史料集より）

以上森資料と諸文献によって、拙速に兵橋重政を述べたが、納得のいかない点も多いと思う。しかしまた新しい史実が判明したことも事実と考えている。

一方、民部大輔友重が、兵橋重政と共に秀吉の馬廻り役として行動していた史実は、各文献が記す朱印状から判明した。真の高政を知るためには、日田在任以前の実名が友重とされていることに對する研究が、今後の課題と考えている。

最後に、森秀郷氏に頂いた多くの資料中には、私が知り得なかった毛利の系譜や、文禄・慶長の役、秀吉と部将に関する動向等、知り得た喜びは大きい。氏に厚く御礼申し上げると共に、今後も一層の御指導を御願ひ申し上げます。

また、引用した文献のうち、中川家文書・黒田家譜・島津史料集・朝鮮史研究・大閩史料集・朝鮮日々記・古郷物語・以上は元会員、故村井強氏の蔵書である。故人に厚く御礼申し上げます。

其の他の参考文献

日田市史・佐伯市史・温故知新録・鶴藩略史（写）

佐伯郷土史・森一族のすべて